

城内散策～中山堂と旧「栄町」周辺

片倉 佳史

台北の歴史をたどる旅。今や人口270万を数える大都市に発展した台北市。その歴史は随所で日本と関わりをもち、結ばれている。今回は台北市の中心部、日本統治時代に栄町と呼ばれた地区の歴史について紹介してみたい。

内地人居住者が圧倒的多数を占めた地区

1895（明治28）年、清国に属していた台湾は日本に割譲され、その統治下に入った。その統治機関となった台湾総督府は、まず日本人が住むための土地を確保した。当時、台北は四方を城壁に囲まれ、その内側は「城中」と呼ばれていた。ここは日本統治時代、「城内」と呼ばれ、各種行政機関が置かれていた。そして、ここに内地人と名乗った日本本土出身者たちが多く暮らすようになった。

城壁は間もなく撤去され、その跡地には三線道路と呼ばれる道路が整備された。その際、用材だった石塊は上下水道の整備に転用され、その一

部は現在も使用されている。あわせて水害対策として淡水河に護岸壁が造営された。なお、後に台北最大の繁華街となる西門町は、早くもこの時期に埋め立て工事が計画されている。

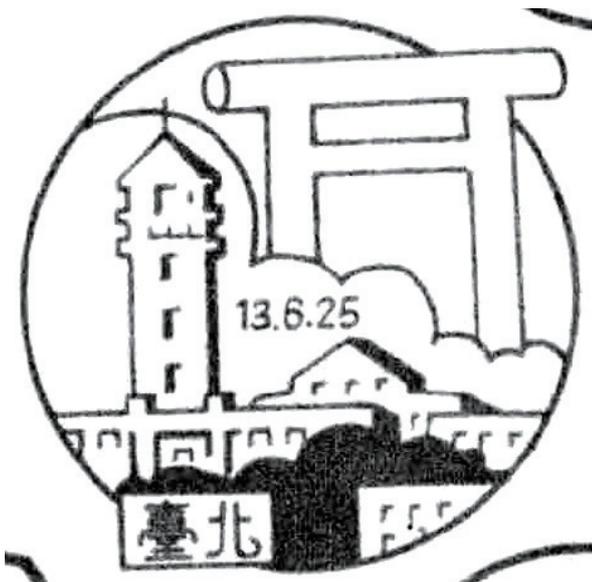
1910（明治43）年8月には未曾有の規模の台風が台北盆地を襲った。この時は在来の家屋の大半が倒壊するという事態となったが、これを機に総督府は大がかりな都市計画を実行する。その後、城内は日本人居住区の様相を呈していった。後に商業エリアとして成長するようになるまで、当時は本島人と呼ばれた漢人系住民が居住することはほとんど見られなかった。

「城内」を探索する

城内は領台当初、空き地が目立ったというが、徐々に島都台北の中核として発展していく。行政と経済の機関のほか、個人商店が多く集まり、賑わいは年々大きくなっていった。同時に緑豊かな台北新公園（現・台北二二八和平紀念公園）があり、文字通りのオアシスとなっていたほか、博物館や図書館なども設けられていた。

当初、城内は清国統治時代の街路名を受け継いでいたが、後に日本式の町名に改められていった。1920（大正9）年9月には、市政が施行され、翌々年には市内の町名がすべて日本式のものとなった。この時には全64町が区画されている。

城内について言えば、本町（ほんまち）、明石町（あかしちょう）、表町（おもてちょう）、京町（きょうまち）、大和町（やまとちょう）、栄町（さかえ



日本統治時代の台北駅に置かれていたスタンプ。台湾神社の鳥居と総督府に加え、台北公会堂の三角屋根が描かれている。

まち)、文武町(ぶんぶちょう)、書院町(しゅいんちょう)、乃木町(のぎちょう)に分かれていた。

大まかには台北駅から台北新公園までが表町、その東側が明石町だった。そして、本町と京町、大和町が城内の北側一角を占める。城内最大の繁華街となっていた榮町があり、その南側一帯が台湾総督府や新公園を含んだ文武町(ぶんぶちょう)。総督府の裏手が書院町と乃木町となっていた。

中山堂—旧台北公会堂

現在は中山堂と呼ばれている公共建築物。散策はここから始めよう。

ここは台湾随一の大きさを誇ると謳われた公共建築である。終戦までは台北公会堂を名乗っていた建物で、昭和天皇の即位を記念して1928(昭和3)年に造営が發起されている。

文献をひもとくと、1932(昭和7)年11月23日に地鎮祭が挙行政され、工事は12月15日に始まったとある。そして、1935(昭和10)年6月13日に上棟式が挙行政され、時の台湾総督府総務長官の平塚廣義や台北州知事だった野口敏治などが参列している。式典は午前8時から屋上で開かれ、祝宴は2階の食堂で行なわれたという記録が残る。建物の竣工式は1936(昭和11)年12月15日に挙行政された。

建物は地上4階建てとなっており、敷地の総面積は1237坪余り。この大きさは当時、東京、大阪、名古屋の各公会堂に次ぐものだった。この建物を眺めると、誰もがどっしりとした安定感に圧倒される。正面には大きな広場があるので、まずは少し離れた場所に立って建物の全容を受け止めてみたい。

設計を担当したのは井手薫。井手は台湾総督府営繕課長を務めた人物で、この時代の台湾建築界を牽引した人物である。台北公会堂はその代表作と言われている。

どっしりとした重厚感たっぷりの建物だが、同

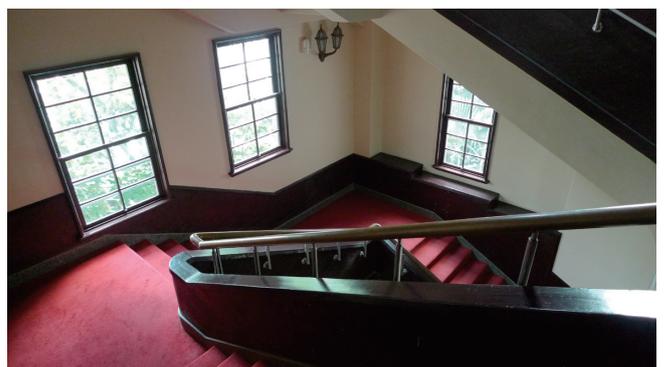
時に、全体に幾何学的な模様が施され、繊細な印象をまとっている。整然と並んだ窓も印象的だ。細部を凝視してみると、日本風の窓枠や中国式の瑠璃瓦なども採用されていて、多様な様式が混在しているのがわかる。

館内には3つのホールを擁していたという。中でも大ホールは座席数が2056名と大きく、一階には事務所、携帯品預かり所、履き物の預かり所、電話室2カ所、手洗室2カ所を擁していた。

二階には大宴会場があった。ここは三階までの吹き抜けとなっており、そのほか、現在はコーヒーショップとなっている貴賓室があった。ここにも控え室と広間があった。三階には大ホールがあった。ここは着席時に1100名、立席の場合は2000名の収容が可能だったという。



中山堂(旧台北公会堂)は建物全体がすっきりとしたデザインとなっている。



中山堂内部。階段も無駄のない機能的な造りとなっている。



中山堂のホール。現在もコンサートや式典などが随時行なわれている。



日本統治時代の台北公会堂。竣工時、台北最大の公共建築物だった。重厚な構えを保っている。

台北公会堂と台湾民主国

台北公会堂は清国統治時代の地方行政府「布政使司衙門」があった場所に建てられた。その隣には巡撫衙門（現・警察局）があった。こちらは台湾の割譲に反対して建国された台湾民主国がその拠点としたところである。

ここで台湾民主国について触れておきたい。日清戦争後、下関で講和会議が開かれ、台湾は日本に割譲された。初代台湾総督となったのは後に海軍大将となる樺山資紀（すけのり）だった。樺山は5月24日、民政局長に任命された水野遵とともに広島の出港。途中、琉球に寄港し、停泊中の近衛師団と合流後、台湾へ向かっている。

樺山資紀と近衛師団長の北白川宮能久親王は基隆港沖合に停泊させた横浜丸の船上で、台湾授受

の式を執り行った。本来の予定では、台北に近い淡水に上陸するはずだったが、先行した軍艦が砲撃を受けたために、これを断念。基隆に変更されたという経緯がある。

当然ながら、台湾の人々は突然やってきた外来の支配者を歓迎しなかった。この頃、台湾東部を除くと、すでに平地の開墾が進んでおり、農耕社会の基礎が完成していた。また、はるか離れた朝鮮半島で行われた日清戦争の代償で、自らの地が異国に割譲されることなど、受け入れられるはずもない。しかも、条約が発効するまで、その内容が台湾の官民に知らされることはなかった。

そして、全土をあげて日本の支配を拒否する機運が高まった。まずは各地の有力者が協議を重ね、清国中央に島民一致の名で「台湾の民は日本の支配を受けず、清国の皇帝を永遠に抱きたい」と請願したと言われる。しかし、国際条約を締結している手前、これが受け入れられることはなかった。

日本側はこういった動きに対し、武力攻勢に出た。鎮定に向かったのは北白川宮能久親王率いる近衛師団で、基隆の南に位置する澳底を上陸地点と定めた。これが日本軍が上陸を果たした最初の場所である。ここは後に近衛師団上陸地点として史跡の指定を受け、石碑が建てられた。この石碑は戦後、中華民国政府によって抗日記念碑と変えられている。

ここから日本軍は台南に向かって抗日勢力を制していく。これは文字どおりの武力制圧で、北部は順調に進撃したものの、南部に向かえば向かうほど抵抗が激しく、激戦を極めたという。

近衛師団は5月29日に澳底に上陸した後、6月2日に瑞芳、3日に基隆を陥落させた。この辺りでの攻防は圧倒的に日本側が優勢だったと言われる。そして、この情報を受けて、敗走した清国兵士たちが台北城内になだれ込み、暴徒と化して民衆を苦しめ始めた。



澳底の上陸記念碑。当初は砲弾を模したデザインだった。
『日本地理大系』より



昭和18年に建て直された上陸記念碑。現在もその姿を留めるが、中華民国政府によって「抗日記念碑」と記されたプレートが据え付けられた。

混乱の台北城と日本軍の入城

当時、台湾巡撫（知事）の地位にあった唐景崧は台湾割譲に反対し、清国中央の洋務派官僚・張之洞の支持も得て、5月23日に台湾民主国自主宣言を出し、翌日には各国の領事館に通達した。

そして、25日に建国式典を行なった。唐景崧は台湾民主国の総統に就任したが、翌日には国会議長の林維源が逃亡してしまうなど、内部の足並みは乱れていた。彼自身もまた、清国の派遣官吏に過ぎなかったこともあり、当初から台湾から去る準備をしていたとも言われている。そんな状態だったので統率力はなく、台湾民主国は早くも崩れてしまった。

当時の状況として、下級官吏ですら台湾という

土地に思い入れはなく、軍規が乱れていたという。そして日本軍上陸の情報が流れるや、瞬く間に統率が取れない状態になった。結局、唐景崧は6月4日、老婆に扮して台北城を脱出。淡水からドイツ船アーター号に乗船して廈門に逃亡した。その後は民主国は大將軍の地位が劉永福に委ねられたが、間もなく日本軍に平定された。

余談ながら、下関条約では台湾のほかに遼東半島の割譲も決まった。こちらは後にロシア、ドイツ、フランスの三国干渉で返還を強いられるが、欧米列強の関心は最初から台湾ではなく遼東半島にあった。台湾民主国としては列強が台湾にも干渉することを期待する部分もあったようだが、実際には台湾への関心は低く、支持を得ることはできなかった。また、清国政府も都に近い遼東半島を重視していたため、台湾割譲については消極的な態度をとり続けていた。

唐景崧に続いた劉永福はもともと台南にいた武将だった。南部に拠点を構え、新来の統治者を嫌った民衆の力もあって3ヶ月にわたって日本と闘ったが、戦力的には全くかなわず、10月19日に逃亡している。そして、翌々日、日本軍は台南に入城し、台湾民主国は崩壊する。台湾総督府は11月18日に全島平定宣言を出している。

台湾民主国は台湾を自立させることによって割譲を阻止するという清国の思惑もあったが、それはかなうことなく、わずか半年で消滅した。それでも、台湾民主国の存在意義は小さくない。同国は体制としてはアジア最初の共和国であり、台湾に生まれた最初の行政機関でもあった。周知のように、台湾はオランダに始まり、鄭氏政権、清国、日本、そして中華民国と、常に外来政権の統治を受けてきたが、そんな中で台湾民主国は台湾の地に生まれた最初の「国家」であることは変わらない。激動のなかに生まれ、はかなく消えていったが、台湾の歴史をたどっていく上では見のがしたくない存在である。

日本統治時代終焉の地

落成以来、台北公会堂では毎日のように演劇や舞台の公演が催されていたという。また、表彰式などをはじめとする式典も多かった。そんな中、最も重要な式典として挙げなければならないのが、1945（昭和20）年10月25日の台湾地区降伏式典である。

半世紀に及んだ植民地統治は「敗戦」という形で幕を閉じた。1895（明治28）年から半世紀続いた日本統治時代はここで終焉を迎えた。台北公会堂で挙行された式典は「受降典礼」と呼ばれ、日本は台湾の領有権を放棄し、その管理が中華民国の国民党政府に委ねられることとなった。

日本は台湾の領有権を手放したが、これに対し、中華民国国民党政府は清国の後継者であると自認した上でこれを「返還」と捉えた。そして、台湾を自らの体制下に収めてしまう。そして、国共内戦に破れて中国大陸を追われた後は、国家体制全体を台湾に移し、その後、半世紀以上にわたってここに居座ることとなった。

式典そのものは非常に簡素なものであったと伝えられている。式典が執り行われた部屋は光復廳と名を変えて残っており、今も式典やイベントなどが開かれたりしている。

戦後、蒋介石率いる国民党政府は独裁体制を敷き、台湾を統治した。その際、台湾が日本の統治下にあった時代を「日據時代」と呼んできた。これは「日本による占拠（據）を受けた時代」という意味だが、歴史を客観視し、中立的な立場から直視しようとする動きから「日治時代（日本が統治者だった時代）」、もしくは「日治時期」という表現が使用されることも多い。馬英九政権は日據時代という呼称を公的に用いるよう指導しているが、反発も大きく、一般的には混用されているというのが実態だ。

また、「光復」という言葉は、日本によって奪わ

れていた光りを取り戻したこと、つまり、台湾が中華民国に「復帰」したことを意味しており、これも国民党政府によって積極的に用いられたが、これは最近はあまり使用されていない。

知られざる祝辰巳の銅像

中山堂の前に大きな広場があるが、その北のはずれに孫文の銅像が建っている。この台座にも注目してみたい。これはかつて西門があった場所に設けられた祝辰巳（いわいたつみ）民政局長像が載せられていたものである。

西門は日本統治時代初期に都市計画によって撤去され、その後にロータリーが設けられていた。通称「楢円公園」と呼ばれていたが、その中央に祝辰巳の銅像があった。ここは城内地区の玄関口であり、繁華街として栄えた西門町にも面していた。城内、西門町ともに内地人居住者が多く住んでいたエリアで、この銅像は多くの人々に親しまれていた。

現在、中華路と呼ばれている道路は台北城の城壁を取り壊した後に設けられたものだが、旧城壁に沿って縦貫鉄道の線路が敷かれていた。この鉄道は現在、地下化されており、痕跡を感じることはできないが、昭和期、西門の楢円公園脇には新起町ガソリンカー停留所という小さな駅が設けられていた。



降服式典が執り行なわれたホール。現在は光復廳と呼ばれている。収容人数は500名となっている。立席であれば1000名が収容可能となっている。

戦後の混乱期、三線道路の上には外省籍の人々がバラックを建てて居住し、その後、中華商場という商店街まで設けられたが、現在は取り壊されている。祝辰巳の銅像は戦時中の金属供出令によって溶かされてしまったが、台座の部分だけは残っていたため、これを中山堂脇に移設し、中華民國の国父である孫文像をその上に据え付けた。つまり、日本統治時代の銅像は失われたが、台座だけは残されて、移設された。そして、その上に孫文像が載せられているのである。

合作金庫銀行城内分行—旧台北信用組合

ここは終戦まで台北信用組合として使用されて



広場のはずれにたつ孫文像。この台座は日本統治時代のもので、かつて民政局長を務めた祝辰巳像が載せられていた。

いた建物である。重厚なたたずまいの建物で、特別な大きさを誇っているわけではないが、歳月を経て、ほどよく色褪せた壁面の色合いが印象的である。近代的な町並みの中に建つ一棟の老建築は、強く存在感を誇っている。

建物の竣工は1927（昭和2）年。台北信用組合として開店した。戦後は中華民國政府に接收され、台北市第十信用合作社となるが、信用組合としての機能に変化はなかった。なお、信用組合は戦時下の1944（昭和19）年には「台湾産業金庫」となっている。銀行として正式に認定されたのは1985年からで、ここはその本店となった。2001年には合作金庫銀行と改名している。

金融機関だけあって、建物は安定感と堅固さを強調したデザインである。左右に疑似列柱を配し



広場から眺めた様子。週末には家族連れや若者たちが憩う姿が数多く見られる。



2階にあるコーヒーショップ「城堡珈琲」は、かつては賓客の控え室だった。戦後、宋美齡専用の休憩室だった部屋もある。

て威厳を添え、中央には半円アーチ窓が設けられている。落ち着いた色合いの壁面が堅固な印象となっており、銀行建築らしい安定感が強調されているのも興味深い。これは1920年代にアメリカで流行していた商業建築にも繋がるデザインということで、注目されている。

そして、正面上部を見ると、フクロウが通りすがりの人々を見おろしている。フクロウはギリシャ神話においては知恵の女神アテナの象徴であるのはよく知られているが、商売にはこういった智慧が必要ということの意味しているのだろうか。

また、古代中国史に目を向ければ、殷（商）の



廊下もまた魅力的な空間である。台湾茶を楽しむ「台北書院」はガイドブックなどにも紹介される人気店。



現在は合作金庫銀行として使用されている。色合いは地味な建物だが、その分、どっしりとした存在感を醸し出している。

時代は猛々しさの象徴であり、昼の墓守りを虎、夜の墓守りをフクロウが担っている。大きな眼を見開いて愛嬌を振りまくフクロウだが、夜行性動物のフクロウは「昼は職員が、夜はフクロウが顧客の財産をお守りします」といった夜警の意味を含んでいたのかもしれない。そんな遊び心が注入された個性的な建築物である。

1998年5月4日には台北市が指定する古蹟となり、保存が決まっている。



屋根に据え付けられたフクロウの装飾。庶民の財産を守るという意味合いを含んでいるという。



栄町の様子。手前に台北信用組合、奥に菊元デパートが見える。絵葉書などでも定番の構図となっていた。

旧和泉時計店

台北を代表する繁華街となっていた栄町界隈。現在は衡陽路と呼ばれている栄町通りだが、その中に、美しい老建築が残っている。終戦まで和泉時計店を名乗っていた建物である。

現在、この建物は全祥茶荘という茶葉販売店となっている。この建物については詳細な記録が残っていないが、1931（昭和6）年発行の『大日本実業商工録』によれば、和泉時計店は各種時計のほか、眼鏡類や貴金属、装飾品などを扱っていたという。広告などを見ると、「台湾総督府及諸官衙御用達」という文字が誇らしげに記されている。店舗は台北市栄町二丁目にあり、店主は丹羽一孝。電話番号は280番となっている。

建物を前にすると、存在感こそ立派なもの、正直な印象としては古さを禁じ得ない。ここに限らず、その姿が瀟洒であればあるほど、落ちぶれてしまった姿は痛々しい。かつては栄町通りでも指折りの規模を誇っていたと思われるが、戦後70年を迎え、周囲に林立した高層建築の中で、窮屈そうな姿となっている。

建物は頂部に塔をいただき、四方に牛眼窓をもっている。ちょっとした楼閣のような雰囲気のある塔があり、独自の風格を保っている。白亜の色合いもまた、格調を感じさせている。1階には美しいアーチを描いた亭仔脚（騎楼）が残っており、重厚な印象だ。ただし、内部は戦後に何度かの改築を受けており、原型は留めているとは言えない。

塔には連珠状に果物をモチーフとした飾紋が見える。これは台中駅の駅舎などにも似たようなものが確認できるが、南国・台湾を意識したデザインで興味深い。

構造としては隣接する伍中行や掬水軒などの店舗とともに、4棟が連続した街面となっている。これらはまとまった形で台北市が指定する歴史建築の指定を受けている。和泉時計店は終戦と同時



旧和泉時計店。現在は茶葉を扱う商店となっている。



日本統治時代の絵はがきにも和泉時計店の姿が見える。

に閉店となり、所有者も変わった。台北銀座の商店の多くがそうであるように、ここも内地人が本土に引き揚げた後は中国からやってきた外省人が住みつくようになり、歴史は断絶した。今や往時

を知る人を探すことも難しい状況である。

菊元デパートの痕跡を探る

通称「台北銀座」の異名を取った栄町通りだが、その象徴的存在であり、ランドマークでもあったのが菊元百貨店である。現在の衡陽路と博愛路の交差点に位置し、現在は国泰世華銀行台北分行の建物が建っている。

その歴史は1932（昭和7）年に遡る。同年の11月28日、実業家・重田栄治が開いた台北最初の百貨店であり、同時に台湾最初の大型商業施設でもあった。

菊元デパートの敷地面積は99・36坪となっているが、亭仔脚（台湾式アーケード）があるため、一階の売り場面積は50坪程度となっている（台

湾建築会誌第4編5号による）。栄町通り、京町通りに面する部分はショーウィンドウとなっていた。

1階から4階までは商品販売スペースで、5階には食堂と喫茶室があった。6階には集会室があり、談話室として使用されていた。5階のレストランは「菊元」を名乗り、洋食を中心としたメニューを誇った。また、当時は珍しかったエレベーターがあり、「流籠」と称していた。エレベーターガールもおり、話題を集めたという。

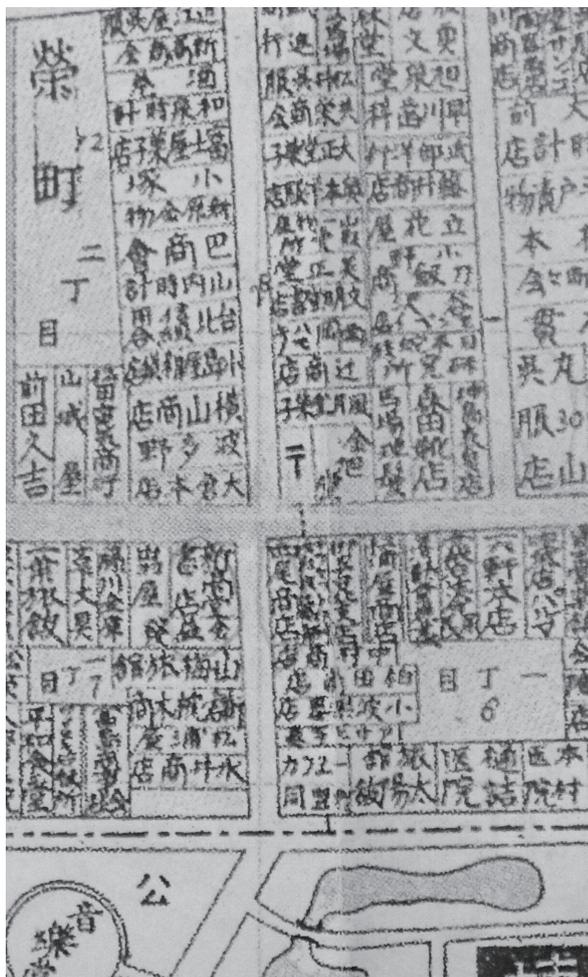
台北の名士として知られた重田栄治

経営者の重田栄治についても触れておきたい。かつて菊元デパートで働いていた従業員によって組織された「菊栄会」編纂の『波瀾を生き抜いた重田栄治の思い出草』という文集によれば、重田は26歳の時に台湾に渡っている。1903（明治36）年10月に大稻埕に菊元商行を構え、綿布の卸売りを始めた。

事業は順調に進み、1931（昭和6）年に百貨店経営を志すこととなった。重田は全国各地のデパートを視察したという。当時、三越や高島屋などが台湾に進出するという話があり、これが重田を刺激したと言われている。設計は台湾土地建物会社に委託し、栄町3丁目に6階建ての店舗が完成した。

重田は実業界で名を馳せると、いくつかの要職を任せられることになった。台北州の議員や台北市商工会議所の役員のほか、台北消防組の組長にもなっている。

台湾における百貨店事業の先駆けとなった菊元デパートは昭和7年12月1日にオープンした。11月末には落成式を行ない、開店披露宴を3日間にわたって催している。この時は関係者や来賓のほか、「敬老会」と称し、70歳以上の老人を内台隔てなく招待したという。この時は余興として「満州踊り」なるものが披露され（詳細は不明）、好評



昭和3年当時の住宅地図。和泉時計店の文字が見える。

を博したという。

なお、重田栄治は連載第18回「天母の歴史を探る」で紹介した中治稔郎とも親しく、ともに北郊の高級住宅地となっている天母地区の開発に当たっている。こちらは戦争によって頓挫してしまっただが、台北に近い天母に温泉リゾートを造営する計画があった。

菊元デパート、建築秘話

先にも挙げた台湾建築会誌には興味深い逸話が紹介されている。本来はもっと派手で、独創的なデザインを発注者は希望していたというのだ。たとえば、4・5階にアーチを設けるとか、外観にも装飾を施すことが求められていたという。

しかし、これらは実現しなかった。残念ながら詳細は不明だが、栄町や京町に完成していた既存の建築群との調和を図るべく、修正を強いられたようである。

この時期、すでに城内は都市計画が進められ、景観整備も行き届いていた。栄町通りには3階建ての商店建築が並んでおり、その中に唯一の高層建築として菊元デパートが参入することになった。

現在の家並みにも言えることだが、台湾の建物は両隣りと壁面を共有しているため、道路に面した部分だけが「表」となる。菊元のように交差点に位置する場合でも、道路に面するのは二面だけであり、残りの二面は隣接する家屋と共有した壁になっている。つまり、大型建築であるにも関わらず、独立建築であれば四方に設けられた外面が二面に限られてしまった。これは商業建築としては大きなマイナスと言わざるを得ない。

また、既存の商店建築は正面に欧風の装飾面を掲げたスタイルだったが、その調和を乱さないことも考慮されたという。その結果、大型建築であれば、地味で質素なデザインが望ましいとされた。結果的には、装飾を排し、窓枠や庇などの直線、

曲線を用いた表現だけで外観が構成されることとなった。おりしもモダニズム建築が流行していたこともあり、すっきりとしたデザインは当時としては「新しさ」を強調することはできたが、発注者はこのデザインをどう思ったのだろうか。

さらに、当時の建築群は華南地方で発達したという亭仔脚を擁しており、歩行者の便を図って菊元デパートも統一されたスタイルで設けられた。そのため、ショーウィンドウは歩行者には存在感を示せるものの、道路（車道）には面していない。また、亭仔脚が夏場の強い陽差しを遮ることを目的に含んでいたこともあり、ショーウィンドウを



菊元デパートの様子。昭和15年頃。『台湾大観』より



昭和10年に開かれた始政40周年記念博覧会で発行された地図。

含めて薄暗くなってしまうという欠点もあった。

なお、この頃、台南では林方一が「ハヤシ百貨店」を開き、高雄では吉井長平が「吉井百貨店」を開店している。以上は日本統治時代の三大デパートとして知られたが、当時の社会環境を考慮すると、百貨店を利用する顧客は内地人、または一部の裕福な本島人（台湾人）に限られていた。しかし、店側が規定を設けていたわけではなく、台湾の古老を取材していると、エレベーターに乗ってみたいと菊元デパートを訪ねたと語るかつての少年少女たちに頻繁に出会う。

戦後は銀行になった。そして保存運動

終戦を迎え、日本が台湾の領有権を放棄すると、栄町の様子も一変した。それまでは内地人街として日本本土出身者と台湾生まれの日本人が圧倒的多数を占めていた栄町界隈だったが、ここに中国大陸からやってきた人々が住みつくようになった。

菊元デパートは民間所有の建物ではあったが、公有財産の扱いを受けることとなり、中華民国政府に接収された。戦後は台湾中華國貨公司と名前を変えたが、百貨店の機能は続くこととなる。その後、1968年に南洋百貨会社が所有者となったが、これは1977年に倒産し、洋洋百貨と名を改めた。しかし、これもわずか二年で閉店。その後は世華聯合商業銀行の台北支店となり、現在にいたる。なお、世華聯合商業銀行は現在、國泰世華銀行と改名している。

そして今、この建物にはにわかに注目を集める存在となっている。2014年6月をもって國泰世華銀行が店舗移転を決め、ここから離れることになったためである。これを機に、建物を歴史遺産として、保存することを求める声が市民から上がった。

明確な決定はないものの、一棟そのものを使用していた國泰世華銀行が出ていくとなれば、当然

より大きな商業効果を期待し、ビルを建て直す計画が出てくる。昨今の台湾では古いビルを取り壊して大型商業施設を作りあげていくケースは多いので、ここもそういった事例となるのは想像に難くない。

ただし、保存を訴える市民の声に反対する勢力もある。日本統治時代に誕生し、戦後も百貨店として使用されてきたのは事実だが、この建物は複数にわたって大がかりな改築を経ており、歴史建築とは呼べないという意見である。確かに、この建物を前にしても、歴史を感じさせる雰囲気は全くない。それでも、一帯のシンボルとして保存を求める声は大きく、台北市文化局は調査チームを派遣し、保存対象とするかどうか、検討に入った。これは台湾のメディアで大きく報道された。

こういった保存運動の背景には2014年6月にリニューアルオープンした台南の林百貨（日本統治時代の名称は林デパート）の存在がある。台南にあった林デパートは菊元と同様、文字通りのランドマークとなっていた。戦後は中華民国に接収され、デパートとしての営業はしていなかったが、1998年に古蹟の指定を受け、現在は郷土文化を発信する基地として整備されている。そして、歴史建築を再利用し、商業施設としても成功した事例として注目されている。菊元の場合もこれに刺激されているのは間違いない。

現実としては、菊元の場合、外観が往時の姿とはかなり異なっており、内部についても、かつての痕跡を感じられるものはない。台湾初と謳われたエレベーターも完全に新しいものとなっていて、原型を留めるのはビルの構造部分だけという状態だ。

現在、台北には数多くの建築物が文化財指定を受け、保存されている。しかし、デパート建築というものはない。インターネットなどでは盛んに意見が挙げられており、台南の林デパートがリノベーションを経て再生されたように、台北の菊元



菊元デパートの全容。アドバルーンも上げられていた。『台湾建築会誌』より

もまた、文化的価値を認め、護っていく必要があるとしている。

今後の動きに注目したいところである。

金石堂書店城内店—旧西尾商店

この場所は現在の地図では重慶南路と衡陽路の交差点に当たる。ここはかつて、西尾商店というカメラ機材を扱う専門店であった。当時は栄町1丁目と呼ばれていた。

この店は機材の販売だけでなく、修理なども請け負っていたようである。戦前の雑誌に出された広告には、「カメラの病院」としてこの店の修理部が紹介されている。また、扱っているものも幅広く、カメラから顕微鏡、望遠鏡、裁断機、アルバムのほか、写真に関する専門書なども扱っていた

ようである。

現在、この建物は大がかりな改修工事を受けており、正面には「金石堂書店」と記された大きな看板が取り付けられている。2階の窓もふさがれてしまい、私自身、最初にここを訪れた際には、この建物が戦前のものであるとは思えなかった。

館内もまた、大規模な改修が施されている。基本的にこういった建築は道路に面して商店があり、その後方に住居が付いていることが多いが、この場合、その住居の部分までも合わせて店舗にしている。その部分については当然ながら、往時を偲ぶようなものは残っていない。

現在、かつての面影を残しているのは、わずかに「亭仔脚」と呼ばれるアーケードの部分だけである。年々、古い建物が建て替えられていく中で、このようにかつての雰囲気を残した建物を探すの



旧柴町通りの夜の様子。奥に菊元デパートが見える。



昭和7年頃の地図。西尾商店の南側には新高堂書店、西側には辻利茶舗があったが現在は痕跡を残していない。

は非常に難しくなっている。この建物もあと何年、この姿を保っていけるのだろうか。その命脈が尽きてしまうのは意外に早いのもかもしれない。

公園号酸梅湯—旧升川洋服店・富島商事社

ここは台北 228 和平紀念公園に面した店舗である。終戦までは日本人の経営する洋品店で、現在は「酸梅湯」と呼ばれる台湾特産のプラムジュースを出す店となっている。両隣りにある店舗も、用途こそ変わっているが、往時の面影を残している。

1936（昭和 11）年末に発行された大日本職業別明細図という地図を見ると、この場所には升川洋服店という名が記されている。また、1931（昭和 6）年に発行された『大日本実業商工録』によれば、店主は島根県出身の升川二三二（ふみじ）となっている。もちろん、現在は洋品店らしき雰囲気は感じられず、升川洋品店についても詳細を知ることにはできない。しかし、建物自体は改造を受



公園号酸梅湯は 228 公園のすぐ脇にある。なお、1935 年発行の地図には、この場所に「富島商事社」という会社名も記されている。日本統治時代の住所は台北市榮町 1 丁目 30 番地。電話番号は 244 番だった。

けていないため、かつての趣は感じとることができない。

この一帯は「榮町」と呼ばれ、台北新公園に面するこの場所は榮町通りの起点となった場所である。榮町は 1 丁目から 4 丁目まであり、居住人口の 8 割近くを内地人が占め、文字通りの「日本人街」となっていた。そのため、終戦で日本人が引き揚げると、多くの建物は主を失うこととなった。家屋や店舗は一時的に放置され、その後は中国大陸からやってきた外省人によって占拠された。そして、中国各地の地方料理を出す食堂などに変わった。

つまり、城内は戦前は日本人、戦後は中国人（外省人）が居座っていた土地だった。そのため、台湾にありながらも、台湾人とは縁が薄いという奇妙な状況となってしまった。現在、この地域の歴史や建物について、調査をするのは思いのほか難しい。



台北新公園から榮町通りを見る。左手に升川用品店の看板が見える。『日本地理風俗大系』より